



「環境治療」を活動の基軸に

私たちは、傷ついた野生動物を治すだけでなく、長年の人間活動で病んだ生態系や自然環境を健全で安全なものへ治していく取り組みを「環境治療」と名づけ、活動の基軸にしています。

環境省釧路湿原野生生物保護センターに収容された、猛禽類の負傷・死亡原因で常に大きな割合を占めるのは、車両や列車との衝突事故です。

搬入されたワシの多くが吐き出すペレット（吐瀉物）から、大量のエゾシカの体毛が検出されることが多く、事故に遭う直前に放置されたシカの轢死体や狩猟残滓を食べていた、と推察しています。また、シマフクロウの多くが一般の道路上で事故に遭っており、上半身を損傷し、体内から未消化のエゾアカガエルが検出されました。

これらの交通事故に対し、ドライ



バーへの注意喚起や、道路管理者による障害物（ポールなど）の設置にも協力してきました。

送電線設備による感電事故も深刻な問題です。北海道電力による感電防止器具（バードチェッカー）の開発に協力してきましたが、電気設備や被害鳥から得られる様々な情報をもとに、事故の状況や発生場所、通電部位などを把握することは、再発防止策を考える上で重要な手掛かりになります。

風力発電は野鳥に対し、風車ブレードとの衝突事故（バードストライク）や行動生態の攪乱、施設建設に伴う生息地の消失などの影響を与えています。バードストライクの発生状況を正確に把握するためのシステム構築や、事故の予防策の検討が重要です。

1990年代後半より、北海道では猛禽類の鉛中毒死が相次ぎ、社会問題になっています。道は、2000年度の猟期からエゾシカ猟での鉛ライフル弾の使用規制を開始。04年度からは、すべての大型獣の狩猟ですべての鉛弾が使用禁止になりました。さらに、14年度からは、エゾシカ猟時の鉛弾所持も条例で禁止されています。

しかし、これはあくまで道内のみの規制であり、全国規模での法的な規制
オオワシの治療に取り組む齊藤代表（右）と
研究所のスタッフ

は存在しません。そこで、25年度から全国で鉛弾の使用を段階的に規制し、30年度までに野生鳥類の鉛中毒ゼロを目標にしています。

終生飼育の猛禽類が活躍

無事に野生に復帰できるのは一部の幸運な猛禽類ですが、私たちが後遺症などで復帰できない個体にも活躍の場を設けることで、快適な余生を送ってほしい、と願っています。

まだ自力で餌を摂れないオジロワシの雛を保護した事例もあります。終生飼育中の雌の成鳥が、この雛に給餌をしたのです。オジロワシの幼鳥が継母に育てられる、初めての試みでした。

感電事故を防ぐバードチェッカーの開発にも、終生飼育の猛禽類が活躍しています。有用性が確認されたものが、道内約2千カ所の送・配電柱で採用されているのです。また、狩猟に伴う鉛中毒の治療の際、血中の鉛濃度を低下させるための輸血用のドナーにも終生飼育の個体が活躍しています。

このような終生飼育を推進するための費用は、環境省からは支給されていません。クラウドファンディングなどの寄付金や、グッズの販売による収益、執筆活動などから得ています。

【連絡先】 猛禽類医学研究所
北海道釧路市北斗2-2101 環境省 釧路湿原野生生物保護センター内
☎ 0154-56-3465 H P : <http://www.irbj.net/index.html>

義嘴づくりや鳥インフル治療も

2019年、交通事故により上嘴（し）と左眼を失ったオジロワシの義嘴の作成を試みることになり、歯科医師らを含めた専門チームを結成しました。2年後には軽くて丈夫なアクリル製の義嘴が完成し、今では自力で採餌や羽繕いをするようになっていきます。

また、昨シーズンは鳥インフルエンザに感染したオジロワシ10羽の治療を試み、うち7羽の救命に成功しました。これは、世界で初めて鳥インフルエンザの治療に成功した事例です。

（まとも・徳光 綾子）

（さいとう けいすけ）日本獣医畜産大学卒業。1994年より釧路湿原野生生物保護センターで野生動物専門の獣医師として活動開始。2005年に「猛禽類医学研究所」を設立。絶滅の危機に瀕した猛禽類の救護や環境治療などに取り組む。著書『野生の猛禽を診る』（北海道新聞社）など。

